

資料

リスク
アセスメント

第 1 回 リスクアセスメントとは？

最近、『リスクアセスメント』という言葉をよく耳にしますが、医療安全管理指針を発刊して以来『リスクアセスメントってどうするの?』といったご質問を受けるようになりました。考えてみれば、臨床検査に関するリスクアセスメントについての書物はないですね。

『医学検査』ではたまに見かけるのですが、「何(規格)に準拠しているのか?」「改正労働安全衛生法に準拠しているのか?」不明なケースが多いですね。

そこで本連載では、「ISO/IEC Guide51」「JIS E 9702」「OHSAS18001」に準拠し、「改正労働安全衛生法」「労働安全衛生規則」に対応したリスクアセスメントについて考えていきたいと思います。本連載が検査室のリスクアセスメントのみならず、施設全体のリスクアセスメントに生かしていただければ幸いです。

リスクアセスメント？

『安全』の概念は、一般的な辞書では“危険がないこと”“危害亦は損傷・傷害を受ける恐れのないこと”となっています。はたして、万に一つの問題もなく、このような状態を確保することは可能でしょうか。

たとえば、車を運転する時、安全運転を心がけていれば絶対に事故を起こさない、安全であるといえるでしょうか。風邪薬を飲む時、用法・容量を守っていれば絶対に安全と言い切れるでしょうか。

リスクアセスメントは、「人は過ちを犯す」、「絶対的な安全は無い」といったスタンスに立脚して論じられています。フェイルセーフ設計やフルブルーフ設計などもその一例でしょう。

フェイルセーフ設計(Fail safe design)とは、機械は必ず故障が発生するということを念頭に置き、故障が発生した場合にも、常に安全側にその機能が作用する設計思想です。

機械であれば、「壊れたまま動作することで、周囲に損害や危険を及ぼすことの無い設計」をいいます。(例えば「壊れやすい部分を設けておき、高い負荷がかかった場合に意図的にその部分が壊れるようにしておくことで、全体が動作しなくなる」など)電気のヒューズは電気機械のショートなどによる過電流が流れると焼き切れ、機器の過熱による他の部品の故障や、使用者への危険を回避することができるのです。

フルブルーフ(fool-proof)は日本語では馬鹿除けまたは馬鹿避けとも言い、なんら知識をもたない者が誤った用法で事故に至らないようにする仕組みと、知識を持たずとも簡単に操作できるようにした、相反する仕組み・設計・思想を指します。同じ意味としてフルセーフティ(Foolish Safty)を用いる場合もあります。

乳幼児などは目に付くものを手に取り、口に入れることが多く、医薬品などの蓋を開けて中身を飲み込み重篤な事故に至ることがあります。医薬品を製造する企業はこれら事故への方策として、蓋を回すだけでは開かない仕組みとして特定のボタンを押しながら回さないと開

かない仕組みを考案して対処しました。

人間工学の観点からはパニック時に予期せぬ行動をとることを観察して、万一の場合にも重大な事故が起きないように複数手順を経なければ実行できない仕組みや検証を行いました。この過程からフィードバックという事後処理への対処方法が生まれ、その後、予期できることはあらかじめ対処するフィードフォワードの考え方が生まれたのです。(出典:フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』)

この“フィードフォワードの考え方”がリスクアセスメントと言って良いでしょう。

ISO/IEC Guide 51で示される“安全”の概念



準拠規格の説明

今回の連載で準拠する法および規格です。

- ・ 労働安全衛生法(以後『安衛法』)
- ・ 労働安全衛生規則(以後『安衛則』)
- ・ ISO/IEC Guide 51:1999
安全側面－安全面を規格に含めるための指針
- ・ JIS Z 8051:2004
安全側面－規格への導入指針
- ・ JIS B 9702:2000
機械類の安全性 — リスクアセスメントの原則
- ・ JIS Q 2001:2001
リスクマネジメントシステム構築のための指針
- ・ OHSAS 18001:1999・18002:2000
労働安全マネジメントシステム

続く…